学位被授与者氏名	荒木　貴裕（あらき　たかひろ）
論文題目	若年就職者のリアリティ・ショックの事例検討と改善策 ～ 大卒３年以内の離職率改善へ向けて ～
論文審査結果の要旨	本研究は、大卒３年以内の離職率の高さに問題意識を持ち、その早期離職の要因の一つとして考えられるリアリティ・ショックに着目した研究であった。第１章では、「早期離職」や「リアリティ・ショック」というキーワードに関して、心理学や労働経済学、教育学など、領域横断的に先行研究が整理されている。特定の専門分野をベースとしていない分、先行研究の整理に厚みがあるとは言い難いが、早期離職の現実に即した多面的な整理を試みたという点では十分に役割を果たすことができたのではないかと考える。だからこそ、リアリティ・ショックの解明を通して早期離職問題の改善策を検討するという道筋を見出すことができたのであろう。 本研究の手法については、8 名の研究協力者の語りに真摯に耳を傾け、先行研究が切り込むことができていなかったリアリティ・ショックの実際を丁寧に掴むことができていた。筆者自身が研究者でもあり当事者でもあったからこそ、研究協力者に寄り添い、核心に迫ることができたと思われる。議論の余地が残されているのは、研究対象者のサンプリングについてである。本研究では、若年就職者の誰もがリアリティ・ショックを大なり小なり感じているであろうという前提に立ち、離職経験者に限定せずにインタビューを行っていた。結果として、リアリティ・ショックの全体像を幅広く捉えることができたという一定の成果は得られたが、今後の課題として、職種や専門性、時期等によって新たな概念が見つかる可能性があることを筆者自身が言及している通り、やはりここに発展可能性があると考える。 研究協力者の語りを元にボトムアップ的に得られた結果図については、何度も試行錯誤を重ねながら導き出すことができていた。職場で直面する具体的な「課題」ごとの整理に留まらず、それらを「事前に想定できていなかった」、あるいは「想定はしていたもののそれを上回るものだった」という、様々な課題に通底するであろう心の働きに着目できた点も非常に興味深い。もちろん、質的なアプローチを通して新たな仮説や概念生成を目指す本研究としては、それこそ読者の想定を上回る仮説や概念の提起に期待したいところであったが、そこまでの目新しさがあったとは言い難い。その点も今後の課題と言えよう。しかしながら、今後の研究の更なる発展の足掛かりを形成した価値は大きいと考える。 2023 年 2 月 21 日に、北九州市立大学北方キャンパス 本館 D-303 教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士(人間関係学)として十分な内容であると判定した。